

4つの「学習の柱」を有機的に組み立て 学びの意義を実感させるプログラム

— 岡山・県立 笠岡高校 —

2006年、笠岡高校の教員たちは総合学習のプログラムACTを完成させた。

それから6年、当時携わった教員のすべてが転任した今も、ほぼ変更なくプログラムは受け継がれ、その重要性が学校に浸透しているのはなぜか。教員・生徒用ツールまで含め完成度の高いACTの内容を紹介したい。

取材・文／永井ミカ

● 実践のKeyword

総合学習

課題探究

進路探究

体験的学習

情報活用能力

コミュニケーション
能力

自己表現能力

教科の枠を超え 生き方を真剣に考える

岡山県立笠岡高校のキャリア教育は、総合的な学習の時間「ACT」を中核として展開されている。ACTとは、自ら行動し（Active）「自ら考え（Thinking）」自分の力で何かを創造する（Creative）の頭文字からとったもの。「自分はどうかしたいのだろうか」「どんな仕事があるのだろうか」「学問って何だろう」「なぜ学ぶのだろうか」など、誰もが一度はもつ疑問について、教科という枠を超えて真剣に考えていくためのプログラムだ。

全体像（図1）にあるように、3年間のACTは相互に関連しあう①～④の4つの学習の柱によって成り立っている。各取り組みは①課題探究学習、②体験的学習、③進路探究学習のいずれかに対応し、①②③にはそれぞれ目標が設定されている。そして、すべての取り組みを通して④情報活用能力・コミュニケーション能力・自己表現能力が育成されるよう考えられている。

校外で評価される 完成度の高さと指導のしやすさ

ACTプログラムがスタートしたのは2003年。最初の3年間こそプログラムを作り上げるための試行錯誤があったが、06年に今の形になってからは、内容はほとんど変更されることなく実践されてきた。4つの柱がバランスよく有機的に結合し、普通

科進学校で必要とされるキャリア教育の取り組みが過不足なく取り入れられているプログラムで、他校の視察を受けると、「できればプログラムをまるごと真似してみたい」といわれることも多いという。

また、指導しやすい体制が整っていることも続いている理由の一つ。各取り組みの詳細な指導案（ダウンロード可）はすべてデジタル化・共有されているのだ。進路課長の有安貢先生はいう。「私も昨年赴任してきてすぐにACTの指導にかかりました。完成度が高く資料も万全に揃っているため、新採用でもない限りいきなりの指導も難しくないと思います」。さらに、教科でできるところは教科で担当するなど、極力担任の手間を省き負担を軽減。一方で、受け持つ生徒たちの様子がよくわかり成長が感じられると校内でも評価され、学校全体で取り組むべき重要なプログラムとして認識されている。

特色コースの取り組みと精神を 継承したプログラム

このACTプログラムができたきっかけは96年にまで遡る。この年、県の方針を受けて、笠岡高校では特色のあるコースづくりへの準備を始めた。そして、99年度「国際社会に即応でき科学的に探求できる人材の育成」「自ら学び問題解決できる生徒の育成」「生徒の個性を伸ばし一人ひとりの自己実現を支援」という方向性を示した普通科・国際科学コースがスタート。体験的な学



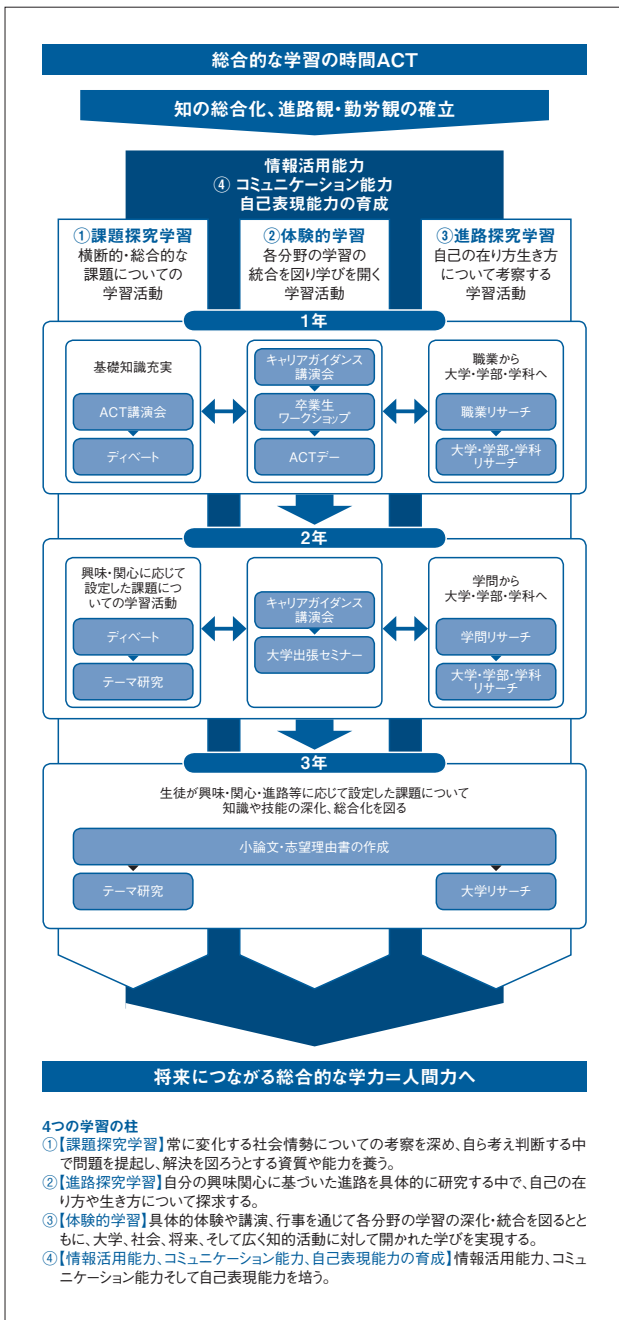
School Data

普通科 / 1902年創立
 生徒数 / 生徒数663人(男子318人・女子345人)
 進路状況(2010年度実績) / 大学88.8%・短大0%・
 専門学校等4.7%・就職0%・その他6.5%
 岡山県笠岡市笠岡3073-2
 TEL 0865-62-5128
 URL http://www.kasaoka.okayama-c.ed.jp/kasaoka.htm

Outline

岡山県笠岡市の高台に立つ伝統校。かつて笠岡湾では群れ遊ぶチドリ姿が見られたことから、千鳥をシンボルとし地元では「千鳥」の通称で呼ばれることもある。卒業生の90%以上は4年制大学に進学。京都大、大阪大などの難関校をはじめ、過去5年間、常に50%以上の国公立現役合格率を達成してきた。2006年度より本格的に総合的な学習の時間「ACT」を導入。「人間力を育む」をスローガンに、知徳体のバランスのとれた生徒の育成を目指す教育を行っている。

図1 ACTの全体像と4つの学習の柱



「当時のACTは、1年間かけて取り組む課題研究をはじめ、とにかくボリュームが多準備も大変。そこで、国際科学コースが

習や課題探究学習など、先進的な取り組みが次々行われた。

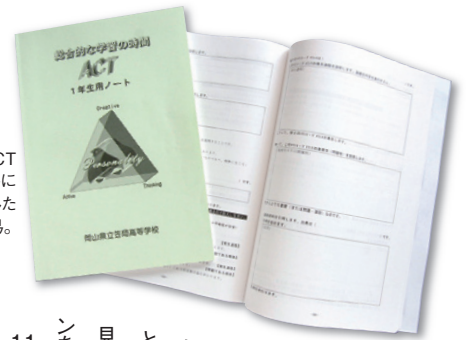
生徒たちは前向きに学習に取り組み、進路実績の面でも輝かしい功績を残したが、定員が少ないという点で受験生に敬遠される側面もあった。同時に持ち上がった、従来の普通科でも講演会や体験学習を取り入れてほしいという要望… 諸々の課題を解決すべく、03年の現教育課程移行の年に国際科学コースは従来の普通科と統合させる形で、発展的解消へ。新生・普通科には、同コースで培った学習活動のノウハウや精神を引き継ぐ総合的学習の時間ACTが誕生した。

築いた財産を引き継ぎながらも、そぎ落とし、そぎ落とししながら今の形に近づけていったと聞いています」というのは、笠岡高校6年目の進路課の吉本良弘先生だ。ちょうどこの頃、同校は学力向上プロジェクトハイスクール事業やIT活用学習推進に向けた研究開発事業など、多くの研究事業に積極的に参加。その予算で情報活用能力の育成やプレゼンテーションに欠かせないコンピュータなどの設備を整え、体験的学習にかかる費用など生徒の経済的負担を減らし、また教員たちがスキルアップをはかりながら、ACTを練り上げていった。

こうして、06年に現在の形のACTがスタート。後に、ACTを作った教員たちが次々と転任していても、内容は変わらないまま受け継がれてきたのである。

職業調べや分野別体験学習を中心とした1学年の活動

1学年のACTは、社会人講演→職業リサーチ→ティベート→体験学習(ACTデー)→大学・学部・学科リサーチという流れ(図2)。生徒たちはまず、職業リサーチで情報収集の基本を覚えるが、ここでは「教育」「医療」などの系列に分かれグループ学習を行う。調べる職業はグループの人数分。つまり、「医療」グループが5人なら医療に関する5つの職業について調べる。「医療」といえば医師か看護師しか思いつかない生徒もいます。グループ学習にすることでさまざまな職業の情報共有し視野を広げてほしいという狙いがあります」と有安先生。調べた内容はパワーポイントにまとめ、



テキストとワークシートを兼ねたACT用のオリジナルノート。ワークシートには切り取り線がついており、提出したりポートフォリオにまとめたりが容易。

最後に教室でプレゼンテーションを行う。

その後、9月にはディベート。全2回のうちの1回目ということ。まずディベートのルールを理解し、ある問題を深く論理的に考えるという経験をする。そして、人前で意見を述べたり、円滑なコミュニケーションをとれるようになることを目指す。

11月のACTデーはプログラムの中でも中心的な取り組みだ。生徒が20〜30人ずつのグループに分かれ、各種施設や企業、大学の研究室を訪問する。例えば「心理・教育・語学・看護系大学研究室訪問」グループは、山陽学園大学短大で講義セミナーの見学や受講、心理実験の体験、付属幼稚園の見学などを行った。ほかに「サイエンスセミナー」「イングリッシュセミナー」など、昨年度は6グループの体験ツアーを実施した。

ここでユニークなのは、各グループのコーディネーターをするのは学年の枠を超えた教科担当の教員たちという点だ。例えば、サイエンスセミナーなら理科の教員の間で行き先や内容を決める。学年団の負担の軽減や、当事者ではない教員にもACTの活動を理解してもらうという狙いもあるが、何よりも、自分の教科で最先端の研究に触れたり講義を受けるといったことが、教員にとっても刺激になり、楽しんで取り組めるのだという。

2学期までに、講演やディベートといった課題探究学習で、教科横断的なテーマについて考えさせ、体験的学習で今学んでいること

図2 年間計画

月	日	実施事項	月	日	実施事項
1年					
1学期			2年		
4	14	(オリエンテーションキャンプの準備)	4	13	学問リサーチ①
4	28	総合学習オリエンテーション	4	20	学問リサーチ②
5	10	ACT講演会	4	27	学問リサーチ③
5	26	職業リサーチ① ガイダンス・情報収集	5	11	学問リサーチ④
6	9	卒業生ワークショップ	5	18	学問リサーチ⑤
6	16	職業リサーチ② プレゼンテーション資料作成	5	25	学問リサーチ⑥
6	23	職業リサーチ③ プレゼン資料作成&班内発表会	6	1	学問リサーチ⑦
6	28	キャリアガイダンス講演会	6	8	学問リサーチ⑧
7	14	職業リサーチ④ プレゼンテーション 1学期自己評価・相互評価	6	15	学問リサーチ⑨
			6	28	キャリアガイダンス講演会
			7	13	1学期自己評価・相互評価
2学期					
9	15	ディベート①「科学技術・環境など」 ガイダンス	8	31	2学期ACTガイダンス
9	22	ディベート②「科学技術・環境など」 リサーチ	9	14	大学・学部・学科リサーチ①
9	29	ディベート③「科学技術・環境など」 リサーチ・作戦会議	9	21	大学・学部・学科リサーチ②
10	6	ディベート④「科学技術・環境など」 リサーチ・作戦会議	9	28	大学出張セミナー事前学習
10	13	ディベート⑤「科学技術・環境など」 ディベートゲーム	10	4	大学出張セミナー
10	27	ディベート⑥「科学技術・環境など」 ディベートゲーム	10	12	ディベート①
11	10	ACTデーガイダンス	10	26	ディベート②
11	17	ACTデーガイダンス	11	2	ディベート③
11	24	大学・学部・学科リサーチ① 進路志望調査票の記入方法説明	11	9	ディベート④
11	25	ACTデー(体験学習)	11	16	ディベート⑤
12	1	大学・学部・学科リサーチ② 進路志望調査票の仕上げ	11	30	大学・学部・学科リサーチ③
12	15	2学期自己評価・相互評価	12	14	大学・学部・学科リサーチ④
			12	21	2学期自己評価・相互評価
3学期					
1	12	大学・学部・学科リサーチ③ ガイダンス・情報収集	1	11	テーマ研究①
1	19	大学・学部・学科リサーチ④ ガイダンス・情報収集	1	18	テーマ研究②
1	26	大学・学部・学科リサーチ⑤ 大学・短大レポート作成	1	25	テーマ研究③
2	2	大学・学部・学科リサーチ⑥ 大学・短大レポート作成	2	1	テーマ研究④
2	9	大学・学部・学科リサーチ⑦ 大学・短大レポート作成	2	8	テーマ研究⑤
2	16	大学・学部・学科リサーチ⑧ 大学・短大レポート仕上げ	2	15	テーマ研究⑥
2	23	自己評価・相互評価 年間反省	2	22	年間自己評価・相互評価

と、進学先や社会とのつながりを実感させた。また進路探究も、まずは職業調べからスタートさせた。これらの経験をふまえて、3学期には活字やインターネットのメディアを使って、大学・学部・学科リサーチを行い、志望を具体的に化させていく。そして最後に、1年の総仕上げである進路志望調査票を書き上げるのだ。

2・3学年の取り組み

1学年の最後に行く大学・学部・学科リサーチは計8時間。そして、2学年になるとすぐ学問リサーチを9時間実施。1学年の最後から2学年のはじめをつないで、じっくりと進路について考える時間をと

ている。さらに2学期になると、1学年のときにも行った大学・学部・学科リサーチを、より具体的に進路先を調べるといって行う。間にディベートをはきももの、期間としては1学年3学期から2学年2学期までずっと進路探究に関する活動が行われていることになる。

2学年の大学・学部・学科リサーチは、入試システムについてのガイダンスから始まり、評価偏差値の計算方法や進路志望調査票の書き方など、一歩踏み込んだ具体的な内容だ。「学びたい学問をやっている大学を冷静に調べつつ、学力という面で自分を見つめてほしい」と有安先生。進路志望調査票を書くところまで含めることで、進路学習の成果がしっかり進路選びにつながってくるのだという。「これだけ時間

をとり、自分が興味がある学問を学べる大学はたくさんあるのだということを理解すれば、生徒の気持ちにゆとりが生まれ、担任も生徒とゆとり向き合えます」と吉本先生はいつ。

そして、このリサーチの間に今度は文系と理系に分かれてディベートが5時間あり、その後はテーマ研究という流れだ。ディベートも2回目ということで、テーマ設定や専門的な調査・理論を構築すること、プレゼンテーションなどをより深く経験できる。その分、以前は非常に時間がかかっていたテーマ研究の時間を6時間と減らすことができた。

テーマ研究は、興味・関心・進路に沿ったテーマで、情報収集と小論文作成を行うものだ。テーマ決定に際しては、教員が、過去



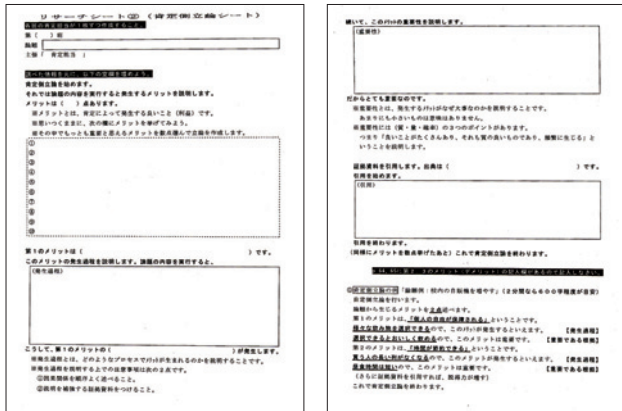
進路課教諭
吉本良弘先生



進路課長
有安 貢先生

図3 ディベート用ワークシート（一部）

ダウンロード可



の入試問題などからヒントを提示。学年によつては、「理科離れ」など全員に共通する大テーマを与える場合もある。情報収集に1時間、800文字程度の小論文にまとめるのに2時間、最後は生徒同士で相互評価させる。大学入試でも役立つ実践的な指導だ。

3学年では、1学期に大学リサーチをしながらレポートタイプの志望理由書を作成させ、2学期以降は小論文指導を実施し、A C T のプログラムは終了する。

**シラバスからワークシートまで
情報を網羅したA C T ノート**

A C T では教員向け資料がわかりやすくまとめられているだけでなく、生徒向けの

図4 自己評価・相互評価表(各学期の振り返り用)

ダウンロード可

自分の学習活動を振り返り、自己評価力をつけましょう。

評価項目と内容	振り返ってみて
【課題設定・解決の能力】 <ul style="list-style-type: none"> 自己の興味・関心や与えられたテーマなどから意欲を持って課題の設定をすることができたか。 課題解決のために、情報収集や調査活動の見通しを持ち、学習の計画を立てて、押し進めることができたか。 	
【学び方やものの考え方】 <ul style="list-style-type: none"> 情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告・発表・討論の方法などを身につけて活用することができたか。 	
【学習への主体的創造的な態度】 <ul style="list-style-type: none"> 自ら進んで学習活動に取り組むことができた。その際に今まで学んだことなどをもとにして自分で工夫して問題を解決しようとしたか。 	
【自己の在り方・生き方】 <ul style="list-style-type: none"> 学習活動の中で自分の挑戦してみたいこと、得意なことに進んで取り組むことができたか。 体験したこと、学習したことを自己の生き方などに生かそうとすることができたか。 	
【知識を応用し総合する能力】 <ul style="list-style-type: none"> 今まで学んだ知識を生かしたり、組み合わせたりして総合的に活用し、問題を解決する発想を生み出すことができたか。 問題解決の過程で気づいたり、考えた事柄を新しい知識としてまとめることができたか。 	
【コミュニケーション能力】 <ul style="list-style-type: none"> 他者とのコミュニケーションを円滑に行うことができたか。 コミュニケーションを通して自己の考えを深めながら課題の設定、追求ができたか。 目的に応じて情報の発信ができたか。 	
【情報活用能力】 <ul style="list-style-type: none"> コンピュータなどのメディアの操作を通して、情報を活用することができたか。 課題解決のためにコンピュータなどを、積極的に活用する意欲がみられたか。 情報モラルの大切さを受け止め、主体的に行動できたか。 	
【自己表現能力】 <ul style="list-style-type: none"> 自分の考え、意見をしっかりと持ち、それを伝えることができたか。 集めた情報をもとに、自分の考えを整理し、個性を生かした表現方法を考え、的確に表現することができたか。 	
総合評価と今後の展望	
友人からのコメント	

ツールも工夫が多い。A C T の内容は、テキストとワークシート(図3)を兼ねた冊子「1年生用A C T ノート」と「2・3年生用A C T ノート」(写真)にすべてまとめられている。冒頭にはA C T の概念や目標、年間計画などシラバスにあたるものを掲載。また、情報収集の方法、レポートの書き方、評価(図4)についての説明がある。自分を振り返り、次の計画、やる気へつなげるために、学期末には自己評価・相互評価をさせるが、評価項目と内容を事前に周知させることで、何のためにA C T をやるのか、どんな力がついていくのか、生徒にも理解しやすくなる。

ディベート、リサーチ、講演会など取り組むごとに、概要、スケジュール、目的、持参物、授業の進め方など、生徒にとって必要な情報

報が網羅されている。ワークシートのページには切り取り線があり、記入後は切り取って提出。教員が生徒に返却すると、各自がポートフォリオに整理していく。

**10年先、20年先に
効果が表れる教育を**

完成度が高く取り組みやすいプログラムとして、6年間継続されてきたA C T。しかしそれは「簡単には変えることができない」という弱点にもつながる。苦心して作られたプログラムで、しっかり学校に浸透しているものを変えるとなれば、それなりの裏付けが必要だ。また、指導案さえあれば、赴任してすぐにも指導できるという点もデメリットになりうる。プログラムを作り上げた

教員の「思い」について知る機会がないまま、形だけをなぞってしまうことになりかねないからだ。「本当は目的さえわかれば、指導案通りでなくてもいいはずなんです」と吉本先生。「こんなふうによつてみたら」などと、A C T について気軽に話し合える場づくりが今後の課題だという。

そして、A C T の効果についても語ってもらった。「二つと二つ真剣に取り組めればそれだいいと思います。進路のことで生懸命悩んでいる生徒を見ると、主体性が育っているのだと感じます」と吉本先生。「A C T は即効性のあるプログラムではありません。10年先、20年先に効果が見えることを信じて取り組んでいます」と有安先生。生徒たちのポートフォリオには、3年間学び、悩み、考えた跡がしっかりと刻まれている。